

産業厚生常任委員会視察研修【浜中町視察】

日 時 平成28年7月21日(木) 14:25~16:00

出席議員 委員長：奥秋康子 副委員長：原紀夫

委員：桜井崇裕、佐藤幸一、安田薫、西山輝和

議長：加来良明

事務局 総務係長：宇都宮学

執行側 農林課長：池守輝人

浜中町出席者

町：藤山農林課長、久野農政係長

浜中町農業協同組合：高橋参事、曾川営農課分析コンサル係関連牧場担当

有限会社 浜中町就農者研修牧場：永洞場長

議 件 所管事務調査「農業施策の現状と課題について」

1. 新規就農者受入の取り組みについて（浜中町農業協同組合）

(1) 訪問者挨拶 14:25~14:27

委員長（奥秋康子）：本日は、清水町議会産業厚生常任委員会の所管調査ということで、浜中町において就農者研修牧場など町独自の制度で、新規就農の先進的な取り組みをされていると伺い、勉強させていただきたいとお願いをしたところ、大変お忙しい中、快く引き受けていただき、ありがとうございます。私たちの町は、西は日高山脈、北にそびえる大雪山系を源として、十勝川が中央を流れている。基幹産業は以前、酪農と畑作の混同形態だったが、近年は酪農専業、畑作専業の形態が増加する傾向があり、大変大型化されてきている。人口は徐々に減少し、9,600人ほどになり、農家戸数も平成7年の522戸から平成27年度には350戸となった。依然、農家戸数の減少が懸念され、将来の担い手不足をどう解消したらいいのかが大きな課題となっている。そういう中で、新規の就農者が平成5年から現在まで14戸だが、新規就農の希望があっても農地が周りの農家に消化され、受入場所がないという現状である。今日は、浜中町の新規就農支援の取り組みをしっかりと勉強させてもらいたいと思うので、よろしくお願いします。

(2) 浜中町挨拶・日程説明 14:27~14:30

藤山農林課長（浜中町役場）：遠路より浜中町へお越しいただき、ありがとうございます。

レジュメにあるように、前半に説明をし、その後、質疑応答・意見交換という形で進めさせてもらう。終了後に就農者研修牧場へ移動し見学を行う。

（浜中町職員紹介）

(3) 説明 14:30~14:53

高橋参事（浜中町農協）：概要として、資料「JA浜中町のご案内 活力ある酪農村と地域社会との協働」を含めて簡単に説明する。

酪農の先進地である清水町よりお越しくださり、ありがとうございます。特段、皆さんにいろいろと話ができるようなことはしていないが、浜中町は、元々が酪農しかないということで、デントコーンもほとんどなく、畑をやっている人もいるが、基本的には牧草と牛だけのところ。農協といっても特別なことは何もなくて、1ページ目に経営理念を書いているが、組合員と地域がきちんとどうやってご飯を食べていけるのかということを考え事業運営を実施している。農業改革がいろいろ言われているが、自分たちの組織は自分たちでご飯を食べていこうという考え方をしている。

1ページ目の中段にあるように、どこも一緒だと思うが、牛が減っているという問題がある。今回も全国で2万頭以上の牛が減っているということで、一番の問題が何も解決されていない。クラスターで国がたくさんのお金を付けてくれる人はいいいのかもしれないが、一方では牛がどんどん減り、いろんな意味で酪農の将来が維持できているかどうか

か疑問に思う。

もう1つが人の確保ということで、後継者はそれなりに戻ってはきているが、どうしても後を継がない、子どもがいないということで、団塊の世代が年金受給になり、経営なり農場がしっかりしていても止めざるを得ないところが増えていると思う。そこは皆さんのところも一緒かなと思うが、その対策をどうするかが課題であるが解決策がないのが現状である。当組合の今年度の経営方針ということで書いてあるが、回復するのになかなか頭を悩ませているのが現状。

2ページ目には沿革とあるが、ここでポイントとなるのが昭和56年の酪農技術センターの開設と雪印乳業茶内工場の閉鎖、翌年のタカナシ乳業の進出がある。1回目の生産調整の後に、全道で2・3か所閉鎖したうちの1か所がこの雪印工場。その空き家になったところに翌年、タカナシ乳業という横浜の当時小さかったと言われる乳業会社を受け入れした。それが転機になり、現在ではいろいろな活動が行われているところ。その当時、組合長は役員をやっていたが、人が一気に減ってしまうという非常に悲惨な状態であったとのこと。特に学校は子どもと一緒に転勤するというので、それくらい大きな出来事だったと聞いている。そういうことがないように、地域がご飯を食べていけるためには何ができるかということがつくづく一番大事なことだと聞かされている。たまたま、タカナシ乳業が来た後にハーゲンダッツというアイスクリームの会社が日本にできた。これはアメリカのハーゲンダッツの元になる会社とサントリーとタカナシが出資した会社で、今もハーゲンダッツジャパンの社長はサントリーの部長クラスが必ず出向してきている。たまたま、タカナシ乳業が来ており、ハーゲンダッツを作る時にどこの牛乳を使おうか探していたところ、ここに行きついたという話。雪印の平成12年の集団食中毒事件の後には、それまで100%浜中町だったが、工場でのリスクヘッジということで、釧路空港の近くにあるよつ葉乳業からもある程度持って行っている。基本的には根釧の牛乳をメインでハーゲンダッツのアイスクリームを作っている。特に、浜中町の牛乳のウェイトは非常に大きいと聞いている。

もう1点は、今回の視察のメインになっているが就農者研修牧場は平成3年に造っている。研修牧場の話ばかりが先行しているが、そもそもは新規就農者をどう確保するかに戻る。道の農業開発公社が昭和57年に道の事業を受けて農場リース事業をはじめている。浜中町では翌年の第2年目から人を受け入れているが、何年間かいろいろな人を集めて新規就農の受入の取り組みを行ってきたが、そのタマがなくなってしまうことが非常に大きい。人がいないからどうしようということだが、普通ならそこで諦めて、人が見つかるまでは待とうとなるが、あまり深くは考えていなかったが、人がいないのであれば自分たちで連れてきて何とかしようということになった。私もそこに関わっていたが、あまり深くは考えていなかった。ちょうどバブル期でもあり、当時、補助金がなかったので農協と町が50%ずつ持ちよって造った牧場である。運営は農協主体でやっていたが、最初に取得する農場をつくり、牛を集め、運営するところまでは農協と町が半分ずつ出し、当時2億8千万円かけてつくっている。牛100頭と牛舎、管理施設があり、人はいろいろな伝手をたどって、北海道に来て農業をやりたいという人を集めてスタートした。ちょうど今年で25年目になる。後ほど施設を見てもらうということで、牛舎はメイン牛舎が傷んで一度直しているが、その後は変わっていない。パーラーなどはシンプルな造りになっている。酪農家が見たら今のパーラーとは信じられない造りをしていると思う。まずは、単純に考えることが原則で、人がいないなら人を集めて育てようというだけの話である。それでもいろいろとでこぼこはあるが、何とか25年やり、卒業生も20数人おり、毎年1人ぐらいは卒業生を入れている計算になる。その他にもヘルパーとして単身で来て結婚して就農したり、一部は研修牧場が一杯で入れず、農家で研修して就農したり、それらも入れるとすでに40人くらいになる。ただ、40人を受け入れている一方、それ以上は止めているという裏側の面もある。しかし、その40人の人たちがいなかったら一体どうなっていたのかということがある。清水町は浜中町よりちょっと牛乳が多いくらいだが、農家戸数は絶対的に浜中町の方が多いと思う。浜中町はまだ175戸あるが、十勝だと120・130くらいで、多いところは1戸あたり1,000トン近くになっていると思う。でも300トンや400トンの人たちは逆に割合が少なくなっているのではないかと思う。

5ページ目以降は農協の概要ということで、清水町あたりだと畑作や畜産などがあるの

で、うちよりも 1.5 倍くらいの規模があったと思う。農業新聞に総会後の取扱の数字が出るので、うちより大分多かったと思う。ただ、6 ページ目にあるように、昨年やっと乳量が 10 万トンを超えたということと、乳価も高いし、牛も高いということで、生産物の売上が非常に伸びている状況。これは北海道ではどこも変わらない。特に畜産・畑作のところは伸びていると聞いている。

9 ページ目以降は、お年寄りのサロンや子どもの塾、お店の問題など、地域の課題も抱えており、エコープなどの子会社の取り組みをやっている。特に、北海道中のエコープはどこも赤字である。ここの茶内の集落は、生鮮食品は向かいの店しかない。うちも 20 年くらい前にお店を止めようかという話があったが、その前に他のお店が止めてしまい買い物難民が出るので、ここからしっかりとやっっていこうとなった。本当は、事務所の下がお店だったが、10 年前に向かいに移した。今は子会社で運営している。国道にあるセイコーマートも子会社で、食料品や日用品を売っている。一昨年からは黒字になっている。農協が 100% 出資しているが、出資配当まではまだっていない。ただ、運営がちゃんとできて、地域の人に物資が供給できればいいということで、組合員や地域の人たちに認知されているので、初期の目的はなんとか達成できていると思う。

牧場関係は、これから説明するが、研修牧場と酪農王国がある。

研修牧場の概要を説明する。「ようこそ！酪農王国「浜中町へ」」というパンフレットをご覧いただきたい。これは研修生の確保に活用しているパンフレットである。お客さんが来た時にも配っているものである。地域の概要も書いてあるので後でご覧いただきたい。

研修牧場で何がポイントになるかということ、7 ページにあるように、いろいろなどころから人が来ていることが 1 つある。遠いところでは九州で、地元の方もいるし、最近では関東、関西が多い。研修牧場に入っても 100% が就農できているわけではない。年によってでこぼこがあるが 3 人に 1 人ぐらいがこぼれてしまう。例えば、別海町の研修牧場は 4 月 1 日に入るというルールであったと思うが、浜中町は来る人の都合に合わせている。入る時期は決まっていないが、来てから概ね 3 年の研修を行うということはルール化されている。それも空き農場ができた時などいろいろな条件により、2 年半で終わったり 4 年かかることもある。あまり堅苦しくルール化しておらず、ケースバイケースでやっている。

就農の流れとしては、もともと公社の農場リース事業をメインにやっていた。最近、予算がきちんと確保できない問題もあり、平成 21 年に農協が円滑化団体の承認をもらい、農家の土地を保有できるようになった。土地を売りたい方がいれば農協が買って運用することをやっている。農協が保有した後、研修牧場に貸して研修生が牛を飼うことをやり、ある程度めどがついたら、その方にそのまま渡すということをはじめている。公社のリース事業だと予算枠がつかなくなったら始められないし、農家をやめる方は時期が決まっているものではなくタイミングの問題があるので、臨機応変に農協が決めるようなスタイルになっている。公社の事業枠がないまま、研修生が 3・4 年目になり、いつまでも研修生として置いておくわけにはいかないということから始めたことである。作業は現場で見てもらえればと思う。

最後に、「～異業種企業とのタッグで地域社会を守る～株式会社酪農王国」という資料を見ていただきたい。株式会社酪農王国は、平成 21 年に農協と建設業等全 10 社が出資して設立した会社。地域の担い手対策の一つとしてこれも始めた。研修牧場はあくまでも家族経営ということで 50・60 頭くらいの普通の農業者を育てるための農場として始めている。酪農王国は、法人牧場のトレーニングということで地域の農業基盤を維持するという意味合いも含めて始めた。裏を返すと、公共育成牧場の牛が集まらない時期があり、牛が少なくなることによって草地の管理がきちんとできなくなるなど、牧場の運営が非常に厳しかったことが背景にある。夏山の放牧地だったと思うが、3 分の 1 くらい採草しなければならぬということで、牛を飼うしかないと始めた牧場となっている。元々は、肉牛などいろいろなことをやってみてうまくいかないこともあったが、最終的には搾乳に変わったという経緯がある。せっかくやるので、少し規模を大きくして、いろいろな人の協力をもらい、出資の母体は農協以外に 9 社入っている。建設・農作業受託 3 社、運輸 2 社、乳業 1 社、飼料 1 社、生産資材 2 社が入り、平成 21 年に会社をつくり、平成 22 年から搾乳をはじめている。農場規模は経産牛が約 350 頭で、全部で 600 頭くら

いいる。平成 26 年から黒字になり、この 1 年くらいで初期投資分を回収できると思う。たまたまここに出資した土木会社が、150~200 頭規模の廃業したところを引き受けて、新たに農業生産法人をつくっている。皆さんのところも、大きな規模のところも、万が一後継者がいなかったり、トラブルで経営をやめざるを得なくなった時に、そこをどうするかという議論が当然出てくると思う。その時の受け皿としてこういうところは必要なのかなと思う。見ていると、あまり経験の無い人だけでやっているが、今の酪農もある程度システム化されているので、それを守ってきちんとやれば問題ない。担い手対策として、地域に人が減った時の受け皿をつくっていくという意味では当然必要だと思う。牛を見たり管理をするためには最低限の人数は必要になるが、搾乳ロボットなどが出てきているので、こういうものと組み合わせることも可能である。酪農家でないと乳搾りができないというイメージがあるが、そうではない。研修牧場も去年の春にほとんど人がいなくなり、全然知らない方ばかりでやっているが、おかしくなるかというところはならない。場長は元々農協でキャリアのある者が行っているが、何かあった時にいるため、先に立って仕事をするわけではない。来て 2・3 か月の方に 100 頭近くの牛を搾ってもらっているが、牛が死亡することはないし、体細胞が高いわけでもなく、それなりに回っている。最低限のことができれば何とかかなと思う。特別な牛（共進会など）ではないので、通常の農場運営をやって、ミルクを売って、牛を売って、ご飯を食べて、家族が健康で生活できればそれでいい。家族が健康であることと、経営をしっかりすることの 2 つがポイントかなと思う。これをクリアできれば、入った方は、あとは自由にやっており、周りの後継者などにも親近があったりしている。今年で 35 年近くなるが、新規就農者の受入の取り組みを行っていなかったら今のように生乳生産量が伸びていなかった。もともとはまわりと共同で物事をやるのが少ないところだった。昭和 50 年代に構造改善事業で集落ごとに利用組合で機械を導入することを行っていたが、10 年も経たないうちに空中分解して、自分で機械を買うようになった。しかし、隣近所との付き合いをしないわけではなく、今でも手伝うことはあるが、共同でやるということではなく、自立して解決しようという気持ちが多い地区だと思う。釧路管内でも、その当時の利用組合形式でやっている地区も結構ある。ここはそういうパターンになっていない。法人も何件かあるが、個人の法人はある。隣近所が集まって大きい法人をつくるのはない。そういう風土であるので、そういう意味では地域にマッチしたやり方だったのではと思う。説明をこのくらいにして、後は皆さんから質問を受けながら説明する。

(4) 質疑 14:53~15:22

藤山農林課長：レジュメでは意見交換となっているが、説明の中の確認や質問の中でいろいろな意見交換という形で進めていく。

桜井委員：家族経営中心で、個人の法人はあるが大きい法人はほとんどないということで、清水町と全く同じ。後継者不足などで、搾乳中止や本町の場合は畑作に転換する場合もあるが、やめる人もいる。周りから見て、「あれだけの農場なのにもったいない」という話で、なかなか新規就農も難しい。浜中町では積極的に研修農場を設置し、やめたところを J A がしっかりと引き受け、新規就農者へ渡せるような体制をつくっているが、我々も将来を見据えてやらなければならないという思いをしている。

A：やめた後を何とかしなければという思いがある。在宅離農になると、農地は周りで助かるかもしれないが、地域コミュニティの運営が回らなくなる。

池守課長：新規就農させるために、公社の農場リース事業の予算が確保されない場合は、農地を農協が直接買うという話があった。本町においては、新規就農者を入れようとしても、離農された農地があっせんして近隣の農家に取られてしまい、農地が残っていないという状況がよくある。農協が先に取って置けば、入る人は決まっているので、入れてあげられると思う。

A：競争にはならない。やめた時に「ここをどうするか」と地域に聞き議論する。

池守課長：普通なら農業委員会のあっせんになると思うが。

A：その時に、本人の意向も含めて、「この農場は新規就農者へ渡してほしい」という話をしたり、「飛び地が多いし、周りの状況を考えても新規就農者は苦勞するから皆で共有して使ってほしい」という話をする。分けるのは農業委員会の仕事だが、その事前の協議を地域と J A で必ずやっている。

池守課長：地域と農協でやっているのか。

A：まずは地域でその農地をどう活用していくかについて議論してもらい、もちろん地域で分配した方がより有効に活用できるとなれば、それはあっせんをして誰が取るかという分配は農業委員会で行う。地域によっては、分配が困難で、新規就農者を入れてほしいという地域の要望があった場合には、農協が円滑化団体になっているのでそこを含めて調整をするべきだということで農業委員会に調整してもらおうという流れになっている。

池守課長：農業委員に委ねると、地域の方は拡大意識が強いので農地を持って行ってしまおう。

A：拡大意識が強いところはこの事業は成り立たない。

池守課長：建物の関係だが、農場リース事業であれば2分の1補助で建物を直してくれると思うが。

A：ここ10年位は建物を直すだけの予算はついていない。中のウォーターカップを直したり、レジコンを打ったり、マットを敷くくらいは出るが、建屋の構造を変えることは無理。

池守課長：昔はつなぎやパーラーにも出ていたが。

A：平成12・13年くらいまでは出ていたが、ここ10年は予算がつかない。

池守課長：それを農協で買うとなれば、直せないでそのままということか。

A：農協でやっている。

池守課長：農協でやって貸し与えているのか。

A：農地の取得等は一時的にやるだけで、就農して全部買い取れる場合は全部譲る。農協は何年か段取りするだけ。農協は預かっているお金を信連に置いてあるだけなので、土地を買ってわずかだが賃料をもらったり、建物を改修して預けて生産してもらった方が、地域にとってはプラスではないか。活きたお金の使い方になると思う。

桜井委員：普通に搾乳ができる体制を整えるということか。

A：例えば、スタンションを外したり、デジコンを入れたり、換気扇を付けたりという作業だったら、地元の業者に頼めば合間にやってくれる。

池守課長：本町は拡大志向が多い。

A：この事業をやるには、拡大意識が高い方を納得させるだけの方法をもたない限りは難しい。どうしても既に住んでいる方の発言力が強い。我々も最初はそうだったが、人がいなくなるという話をし続けるしかない。人が減ることは町の将来にとってすごく大きなこと。

池守課長：あと10年くらいで20戸くらいの方が後継者不足で減ると予想されている。農地も600町は出てくる。それをどういうふうにも他の人に分けられるかはわからない。

A：600町を全農家で分けると3町くらいになるのでは。

池守課長：場所によってはどうなるかわからない。

A：あとは、そんなに土地をたくさん持たなくてもできる方法を考える。搾乳にこだわらず、例えば、畜舎と施設と少しの場所があれば和牛の繁殖農家をつくるなどできるのでは。牛の資源も減ってきているので、引き合いは強いと思う。TPPが来ても和牛の場合は別次元なので、バッティングしないだろうと思う。

原委員：昨日は、標茶町の町営育成牧場に行ったが、今聞いた話と共通するところがある。清水町の牧場を見ると、職員の年齢が非常に高く、なかなか若い人が来ないという状況にある。専門的な知識がないと牛を飼うのは大変なのではという意識があったが、標茶町を訪れた際に「素人でも大丈夫」という発想であった。

A：標茶町の牧場は、多和地区にある町営育成牧場のことか、それとも昨年開始した法人牧場のことか。

(町営牧場との声あり)

A：多和地区にある町営育成牧場は素晴らしい牧場。法人牧場については昨年担い手育成のための牧場を始めている。私も農家出身であるが、小学生から搾乳をやっていた。だから特別難しくはないと思う。研修生はやる気があって意識が高いので基本を教えていけばうまくやっていける。

原委員：研修牧場で3年間勤めたあと、自立をして成功している人はたくさんいるのか。

A：最初に説明をした資料の7ページに書いてあるが、出身地の後に印がついているのは研修牧場の研修生から就農した方、印がついてないものは農家の実習生やヘルパー出身者。やめた方は今まで2・3人くらいでほとんどやめていない。事業としての失敗は少ない。うちでは、30年はやらなければならないので、最初から無理をしてはだめと言っている。

一生懸命やる方がいるが息切れをしてしまう。要はご飯を食べることができればいいという考え方。

池守課長：研修牧場には採草という作業も入ってくるのか。

A：基本はコントラでやっている。一部は自分たちで収穫する。

桜井委員：TMRセンターはあるのか。

A：集落で1か所やっているところがあるが、基本的にはない。

池守課長：ヘルパーをやっている人で入りたい方が結構いるが、研修をしているかという話になる。

A：私たちのところでは、ヘルパーは時間があるときに畑の手伝いに行って身に付けている。

池守課長：農業委員会で権利の移転を許可するときに、技術的なものを持っていないと農地法第3条要件に引っかかるのでは。

A：コントラはないのか。

池守課長：コントラはあるが、そこで取得するのはどうか。

A：畑の管理はコントラに任せるのはどうか。

池守課長：それはいいのか。

A：基本的には、ヘルパーできちんとできている方であればいいと思う。

池守課長：搾乳ができて牛の管理ができればいいのか。

A：搾乳は基本的には人に頼むことではないが、牧草の収穫は人に頼んでもいい。一番大事なところができればあとはなんとかかなるような気がする。年間3週間くらいしか使わない機械を全部そろえるのであれば、牛に集中した方がいいという考え方もある。地域にTMRがあれば草地がなくてもできるのか。

池守課長：できる。

A：TMRの中に入れてもらえれば、えさをそこから買えるので草地がなくてもできるということか。

桜井委員：機械もいらなくなるが、そのかわりたくさん搾らなければならない。

池守課長：拡大志向はあるが、拡大しても人がそんなにいないので何とかしてほしいと言われる。

浜中町では面積だけ広げて手が回らないという人はいないのか。

A：自分で経営をしているので、経営者のようにどうか。拡大しても構わないが、最後の責任は自分が取らなければならない。

藤山農林課長：「浜中町新規就農の現状と支援状況」の資料を配付しているので、参考にしていただきたい。これから就農者研修牧場の現地の視察を行う。車で先導して案内をする。

(5) 就農者研修牧場視察 15:45～16:00

(有限会社 浜中町就農者研修牧場 永洞場長の案内により、就農者研修牧場の牛舎を視察)